

## 注目される種のカテゴリー（ランク）とその変更理由

## ほ乳類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

## ■ カワネズミ

情報不足（DD）→ 絶滅危惧Ⅱ類（VU）

カワネズミは、モグラ類トガリネズミ科の仲間で、ほ乳類の中では唯一溪流で生活する動物である。山口県内での生息状況がわからず情報不足（DD）となっていたが、2010年以降、捕獲や目撃情報により、県内各地の河川上流部での生息が確認できた。しかしながら、個体数は少なく、安定した個体群が維持できる状況ではない。こうした状況から絶滅危惧Ⅱ類（VU）とした。



提供：田中 浩（2013.6.19 撮影）

## ■ モリアブラコウモリ

新規 情報不足（DD）

本種は西日本での捕獲例が少なく、九州では確認されていない。県内でもこれまで確認されていなかったが、2017年の調査で広島県および島根県との県境の標高およそ 1,000mのブナなどを含む天然林内で初めて捕獲された。冬眠場所を含む生息環境や分布および生態は不明であることから、情報不足（DD）とした。



提供：衣笠 淳（2017.8.20 撮影）

## ■ ニホンジカ

絶滅のおそれのある地域個体群（LP）↘ 削除

本県に生息するニホンジカは、南日本型に分類される数少ないホンシュウジカ個体群であり、生息分布域が県西部に偏って存在し、他の地域個体群と分断されていたことから、レッドデータブックやまぐち（2002）では絶滅のおそれのある地域個体群（LP）に選定されていた。しかし、近年では、農林業被害が高い水準で発生するまでに個体数が増加しており、県中部・北部の島根県境まで分布を拡大するなど隣県の地域個体群との交流の可能性もあるため、今回のリストから削除した。



提供：田戸裕之（2010.12.2 撮影）

## ■ ツキノワグマ

絶滅危惧ⅠA類（CR）↘ 絶滅危惧Ⅱ類（VU）

本県に生息するツキノワグマは、島根県、広島県、山口県の県境を中心とした西中国山地地域個体群に属しており、他の地域とは安定的な交流がない孤立した個体群である。県内では、かつては県東部の山間部を中心に生息していたが、近年、県西部での目撃情報が増加するなど分布が拡大傾向にある。また、1998年からの5年毎の調査における推定生息頭数は、2004-2005年調査から2009-2010年調査にかけて増加し、その後、安定傾向にあることから、絶滅危惧Ⅱ類（VU）にランクを下げた。



提供：田戸裕之（2015.6.28 撮影）

## 鳥類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ タンチョウ

絶滅 (EX) ↓ 絶滅危惧 I A 類 (CR)

江戸時代の文献には周防や長門からの産物としての記載があり、大正時代には熊毛町八代でナベヅルに混じって飛来した記録がある。しかし、これを最後に県内への飛来はなく絶滅 (EX) とされていたが、2007年11月に山口市名田島の水田に幼鳥1羽が飛来した。この個体はしばらく逗留し越冬も確認されたため、絶滅危惧 I A 類 (CR) とした。



提供：原田量介（2007.11.26 撮影）

### ■ チュウヒ

絶滅危惧 II 類 (VU) ↑ 絶滅危惧 I B 類 (EN)

生息少数。生息には草地や農耕地、ヨシ原湿地が揃っている環境が広く必要である。このような環境はもともと少ないうえに、大規模太陽光発電所の格好な立地場所となり、県内だけでなく全国的にも生息環境が激減している。1997年に宇部市西沖の山干拓地で繁殖が確認され、当時は日本最西端の繁殖地であったが、4~5年で繁殖できなくなり、2007年には県立きらら浜自然観察公園の狭いヨシ原で2年続けて造巣は確認できたが繁殖には至らず。それ以外繁殖記録はなく、越冬期の個体数も減少しているため、絶滅危惧 I B 類 (EN) とした。



提供：原田量介（2004.12.23 撮影）

### ■ ヤマセミ

準絶滅危惧 (NT) ↑ 絶滅危惧 II 類 (VU)

ヤマセミはブッポウソウ目カワセミ科の鳥で内陸部の河川沿いから上流部、溪流部にかけて生息する留鳥で、ほとんど移動しないので生息が記録されたところでは繁殖しているものと思われる。ところが、1990年、2000年、2017年と3回にわたって県内全域を300メッシュに分け繁殖期と越冬期について現地調査を行った結果、繁殖確認メッシュ数、観察記録数ともに減少傾向が顕著である。分布域はもともと県東部から中部の山地寄りであって、県西部の下関市や日本海側沿岸部には少なく、豊北町周辺には隔離的に分布していたが、最新の調査ではその隔離分布していたところでの繁殖、生息記録がなく、繁殖個体群が消失した可能性が高い。原因として河川改修や開発などによって営巣に適した土崖等が少なくなったことによって、個体数も減少傾向にある。



提供：小林信行（2018.1.2 撮影）

## ■ オオジュリン

山口県には冬鳥として飛来し、小規模な群れを形成し生活する。生息場所は干拓地や河川、河口のヨシ原にほぼ限定される。食性は種子や昆虫などの雑食性で、ヨシの茎に縦に止まり、葉の鞘を剥がして中にいるカイガラムシなどの昆虫類を捕食する。山口県では干拓地等のヨシ原の減少により生息場所が急速に狭められており、生息場所が失われる懸念があることから、今回新規に準絶滅危惧(NT)に指定する。

新規 準絶滅危惧 (NT)



提供：開作秀敏（2011.2.25 撮影）

## 両生類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ カスミサンショウウオ

準絶滅危惧 (NT) ↗ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

山口県におけるカスミサンショウウオには下関市から美祢市美東町にかけての集団と、山口市北部から萩市田万川地域にかけての集団の二グループがあり、両者は異なったタイプとして区別される。前者は標準的なカスミサンショウウオで「標準型」と呼ばれ、九州に産するものと同じものと考えられるが、後者は「標準型」とは形態・生態的にかなり異なっており「阿武型」と呼ばれている。繁殖行動において両者は異なっており、「標準型」が産卵場所に対する保守性が低いのに対し、「阿武型」の方は保守性が高い。そのために「阿武型」は圃場整備後に絶滅するというケースがいくつかある。この阿武型は山口県以外では島根県の津和野町にしか見られず、他地域のカスミサンショウウオとは異なる特異な集団であり、貴重である。



【標準型】提供：大川博志（2007.2.3 撮影）



【阿武型】提供：大川博志（2005.2.12 撮影）

### ■ ナガレタゴガエル

2009年に、山口県での生息が初めて確認された。これまでのところ、山口県と島根県が全国的な分布の西限域に当たり、分布域も、県東部のごく狭い範囲に限られることから、貴重な種である。タゴガエルに類似するが、後肢のみずかきが、より発達する。山間部の森林に生息し、早春に、溪流の水中で抱接したつがいが、流下しながら産卵場所を探すという、特異な生態を持っている。

新規 絶滅危惧ⅠA類 (CR)



提供：田原義寛（2016.4.3 撮影）

## は虫類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ ニホンイシガメ

準絶滅危惧（NT）↗ 絶滅危惧Ⅱ類（VU）

日本固有種で本州、四国、九州およびその属島に分布する。本県ではおもに山村部の小河川や溜池に生息し、その周辺の水田に移動して餌を捕食したり、畑に産卵したりして生活している。今回の調査は、前回の選定時に本種が確認された生息域を中心に、目視による観察を行った。その結果、前回に比べ個体数が減っていることが確認された。また、新たな生息域は殆ど確認できなかった。このことから絶滅危惧Ⅱ類（VU）に選定した。個体数が減っている理由として、生息域の水田や畑、溜池の減少、三面張り等の河川工事等の影響が考察された。



提供：徳本 正（2010.5.22 撮影）

### ■ タワヤモリ

準絶滅危惧（NT）↗ 絶滅危惧Ⅱ類（VU）

照葉樹林を残す瀬戸内海の海岸や島の岩場から低山帯に分布し、岩の割れ目や石垣・セメント壁の隙間で小動物を捕食する日本固有種である。当種については、県内の生息地が消滅し、山陽小野田市以西での生息が確認できない。なお、近年、外来種の可能性が高いと考えられているニホンヤモリとの競合も個体数減少の要因と推測される。

## 淡水産魚類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■サクラマス、サツキマス、ゴギ 絶滅危惧 I B 類 (EN) → 絶滅危惧 I A 類 (CR)

サクラマス（降海型）が河川内で2003年以降に採捕された確実な記録は2008年の1例のみであること。サクラマス（陸封型）の2003年以前の生息記録のあった河川全てでアマゴへの置換および混生状態にあることから、山口県在来のサクラマス個体群はすでに絶滅している可能性が極めて高い。



▲サクラマス降海型 提供：畑間俊弘



▲サクラマス陸封型 提供：畑間俊弘



▲サツキマス降海型 提供：畑間俊弘



▲サツキマス陸封型 提供：畑間俊弘

サツキマス（陸封型）は、県外由来個体の放流が漁業協同組合、遊漁愛好家により、

全県的に実施されており、山口県在来と推定される個体群は、県東部の極めて限られた地域に残存している程度と推定される。サツキマス（降海型）の主な生息河川では、遊漁愛好家による県外由来種苗放流による遺伝子汚染、主産卵場の消滅、禁漁期の親魚密漁の横行により、在来個体群は危機的状態にある。

ゴギは、島根県高津川水系からの移入による人為分布説もあったが、近年の遺伝子解析調査により、山口県在来と思われる個体群の存在が確認されている。一方、遊漁愛好家による県外産のイワナ（ニッコウイワナ）が、県内河川に放流された事実が判明しており、遺伝子汚染から、在来個体群を保全することが急務な状態にある。



▲ゴギ 提供：畑間俊弘

加えて、大規模ダムや治山ダム設置による生息地の消滅や分断、森林伐採のための林道開設に伴う土砂流入が、今後も続くことは確実であり、生息環境の好転要素が全く見当たらないことも、サクラマス、サツキマスおよびゴギのランクを上げる結果となった。

### ■イシドンコ

イシドンコは2002年に新種記載された種（Iwata & Sakai, 2002）であり、2003年以前の山口県内分布は、県北部の1水系のみとされていたが、最近の調査から県内の分布状況が把握され、新たに2水系に生息していることが明らかとなった。なかでも、錦川水系の個体群は古高津川と錦川との河川争奪の結果、瀬戸内海斜面河川に分布するようになった生物地理的、学術的にも貴重な個体群である。一方、生息地の多くは局所的であり、今後、生息環境悪化による局所絶滅の危険性が高い。さらに観賞用の販売を目的とした採捕実態も確認されていることから、今回の改訂で新たに絶滅危惧 I A 類 (CR) として選定した。

### 新規 絶滅危惧 I A 類 (CR)



▲イシドンコ

提供：畑間俊弘

■シマドジョウ属魚類

- ・イシドジョウ
- ・チュウガタスジシマドジョウ
- ・オオシマドジョウ
- ・ヤマトシマドジョウ種群

絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ↑ 絶滅危惧ⅠA類 (CR)  
 新規 絶滅危惧ⅠA類 (CR)  
 新規 絶滅危惧ⅠB類 (EN)  
 新規 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

イシドジョウは近年の調査で、新たな生息河川も確認される一方、2003年以前に多産した生息地の多くで、生息が確認できなくなっている。加えて、観賞用として販売目的の採捕が増加していることも、生息地減少の一要因と考えられる。

チュウガタスジシマドジョウは県内では、島田川水系のみに生息し、2003年以前は水系内の広い範囲で確認されたが、近年の調査では生息地が特定地域に集中する傾向となっている。

オオシマドジョウは瀬戸内海東部の2河川において、1970年代以降の採集記録が全くなく、近年の調査でも採集されず、これら河川では絶滅した可能性が高い。また、同じ東部地区の1河川においても局所分布状態となっており、極めて危機的状態にある。

ヤマトシマドジョウ種群のうち、長門市の一個体群については、国内でも、当該個体群のみ特有な遺伝的特徴を保有しており、将来的に別種となる可能性が高い。県西部のヤマトシマドジョウ種群についても、局所分布状態となっている河川が3河川存在する。中でも分布西限河川の個体群は極めて危機的な状態にある。

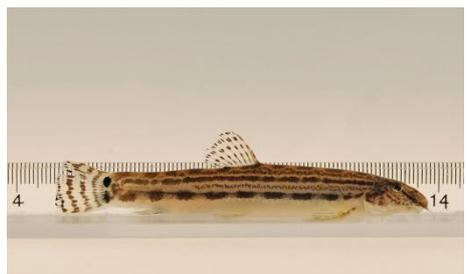
加えて、2003年以前の記録と近年の調査結果との比較から、シマドジョウ属魚類全種の県内における生息環境は著しく悪化し、生息環境の好転要素がないと判断された結果、今回の改訂でシマドジョウ属魚類全種が新規記載もしくはランクを上げた。



▲イシドジョウ 提供：畑間俊弘



▲チュウガタスジシマドジョウ 提供：畑間俊弘



▲ヤマトシマドジョウ種群 提供：畑間俊弘

## 甲殻類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ ヤマトヌマエビ

体長 30～45mm の通し回遊種である。1991 年から 2017 年にかけて行なわれた県内河川の調査結果では、出現地点と出現数がもっとも限られていた種である。過去の調査では瀬戸内海側で 1 河川、日本海側で 3 河川から報告があるが、2016・2017 年の調査では従来みられた河川では出現せず、日本海側の 1 河川に少数出てきたただけであった。今回新規に準絶滅危惧 (NT) に指定する。

新規 準絶滅危惧 (NT)



提供：荒木 晶 (2018.3 撮影)

### ■ トゲナシヌマエビ

体長 25～35mm の通し回遊種である。過去に行なわれた県内河川の調査では、瀬戸内海側の河川では出現せず、日本海側で 4 河川にみられた。ヤマトヌマエビに次いで出現個体数が少ない。2016・2017 年の調査ではやはり瀬戸内海側の河川や従来みられた河川では出現せず、日本海側の 1 河川に少数出てきたただけであった。今回新規に準絶滅危惧 (NT) に指定する。

新規 準絶滅危惧 (NT)



提供：鈴木廣志 (2007.8 撮影)

### ■ ヒメヌマエビ

体長 10～20mm と小形の通し回遊種である。準絶滅危惧種指定以降の調査を含め瀬戸内海側で 2 河川、日本海側で 6 河川から報告があるが、2016・2017 年の調査では瀬戸内海側の河川では出現せず、従来みられた日本海側の河川のうち 1 河川に少数出てきたただけであった。前回同様の指定を継続するのが妥当だと思われる。

変更なし 準絶滅危惧 (NT)



提供：後藤益滋 (1996.9 撮影)

## 昆虫類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ モートンイトトンボ

北海道、本州、四国、九州に分布している。平地から丘陵地の湿地や水田の畦脇、休耕田などに生息し成虫もほとんど移動しない。埋め立てや圃場整備などにより、全国的に減少していて、絶滅した都道府県もある。山口県では、防府市及び山口市の古い記録はあるものの、それ以降確認されていなかったが、2015年に周南市のごく狭い範囲で再発見された。しかし、それ以外の地域では確認できず、本種を見ることができる生息地はこの周南市のみであることから、新たに絶滅危惧 I A類(CR)に選定した。

新規 絶滅危惧 I A類 (CR)



提供：伴 一利 (2016.6.17 撮影)

### ■ シロヘリツチカメムシ

本州、四国、九州に分布するが、生息地が限定され、個体数も少なく、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧(NT)とされている。県内では1998年に秋吉台で見つかった1個体の記録のみで、その生息状況が不明のためランク外となっていたものと考えられる。その後、2015年、2016年に同じ秋吉台で再確認され、食草であるカナビキソウも所々に見られることから、少ないながら秋吉台には本種が生息していることが明確になった。カナビキソウは、ススキに半寄生し、日当たりが良い草丈が低い草地に生えるが、現在、秋吉台はススキやチガヤからササやセイタカアワダチソウへ植生遷移が進み、カナビキソウの生育環境の悪化により、本種の生息が危惧されるため、新たに準絶滅危惧(NT)に選定した。

新規 準絶滅危惧 (NT)



提供：伊ヶ崎伸彦 (2016.6.11 撮影)

### ■ フタスジカタビロハナカミキリ

日本亜種は本州、四国の山地にかけて局地的に分布する稀な種で、県内では山口市・萩市・岩国市で記録があるが、2000年の山口市の記録を最後にそれ以後の記録がない。成虫はヤマシャクヤクの花粉を食するため、ヤマシャクヤクの花を探せばよいので調査地も限られてくるが、2000年以降も毎年調査したが再発見にいたらなかった。かつての発生地でもヤマシャクヤクの群生は少なく、成虫・幼虫ともにヤマシャクヤクに依存している本種にとっては、ヤマシャクヤクの減少と採集圧により山口県では絶滅したものと思われる。

絶滅危惧 I A類 (CR) ↗ 絶滅 (EX)



提供：椋木博昭 (2002.5.12 撮影)

### ■ キバネツノトンボ

本州と九州に分布し、産地は極めて局限される。県内の記録は岩国市の錦町と美和町から報告されているが、非常に局地的で個体数も限られる。乾燥した明るい草むらを好み5月上旬頃から年1回発生する。最近の状況では錦町は2008年の記録が最後で、美和町では2010年に発見してから、確認できない年が続いていた。2017年の調査で再発見し局所的に生き残っていることが判った。ただ草むらの維持管理に安定性がないことが、本種の発生に影響を与えていることも判ってきた。これから生息地は失われる懸念があり、このたび絶滅危惧Ⅱ類(VU)として選定した。

### 新規 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



提供：稲田博夫 (2017.5.8 撮影)

### ■ ウマノオバチ

国内の分布域は本州、四国、九州で、里地など身近に見られる。本種は著しく長い産卵管をもち、大型のカミキリムシに寄生する。以前は詳しい調査が行われなかったことと、クリ林の減少などによって絶滅危惧Ⅱ類(VU)とされていた。しかし、クリ園の放棄などの生息環境の好転やハチ類への関心の高まりによる継続的な調査によって県内の山口市、宇部市、山陽小野田市、防府市、周南市、美祢市、下関市、萩市、長門市、岩国市で確認された。更に島嶼部にも分布するなど、ほぼ県内全域に生息していると考えられ、このたびの見直しに際してはランク外とした。

### 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ↘ 削除



提供：後藤和夫 (2015.5.8 撮影)

### ■ カキヌマホソクバエ

宇部市厚東川河口を模式産地として記載されたクバエである。全国的に模式産地以外では確認されていない。河口の砂泥地帯で、カラヨモギやハマサジが自生する比較的開けた地点に生息するが、このような環境は全国的にも希となっている。山口県の模式産地も流入する土砂の減少のためか年々面積が減少しており、わずかに残った陸地はススキやセイタカアワダチソウに覆われ、危機的状況となっている。実際、原記載以降の調査では全く採集されていない。ただし外部形態が似るウベホソクバエとは野外では区別できず、見逃されている可能性もあるが、絶滅危惧ⅠA類(CR)と判断した。

### 新規 絶滅危惧ⅠA類 (CR)



提供：柿沼 進 (2010.5.8 採集)  
(2010.12.28 撮影)

## ■ カタツムリトビケラ

北海道、本州の東北を除き、近畿から中国、四国、九州の低山地に局地的に分布する。また、本種は、地下水や伏流水などが滲出する急斜面を好適な生息場としており、県内では1990年代～2000年代まで山口市、萩市、防府市、周南市、岩国市の山間部に広く生息していたが、2010年以降の開発行為や大規模災害による生息地の破壊やそれに伴う対策工事が重なり、急速に生息地の喪失が進んでいる。そのため、まとまった個体数が確認されるのは佐波川水系と錦川水系に限定される。そのうち、錦川流域では大規模工事によって、生息地の一部がすでに消失し、またはその多くが消失の危機に晒されている。本種に対しての具体的な保護対策も不十分であり、新たに絶滅危惧Ⅱ類(VU)に選定した。

## 新規 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



提供：後藤益滋 (2018.1.3 採集・撮影)

## ■ オオミノガ

## 絶滅危惧ⅠA類 (CR) ↘ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

本種は中国から移入し、勢力を増大したオオミノガヤドリバエによる寄生で大激減し、2002年、絶滅危惧ⅠA類(CR)に指定された。その天敵オオミノガヤドリバエも数種の寄生バチやアリ類など「天敵の天敵」の出現や、唯一の寄生対象である本種の激減で勢力は抑制された。2010年頃には、本種は復活し、健全なミノを目にする機会は増大した。しかし、近年、再び寄生バエが勢力を回復し、本種のミノを多数、確認できても、寄生率は極めて高く、再度、衰退が懸念されてきている。今後の天敵との勢力バランスの動向が注目され、レッドリスト見直しに際して、絶滅危惧Ⅱ類(VU)として選定した。



提供：重中良之 (2017.6.22 撮影)

## ■ ギフチョウ

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ↗ 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

日本特産種で山口県が本州の分布の西端となり、四国や九州は分布しない。食草はカンアオイで、山陽側と山陰側でカンアオイの種類が異なる。山陽側では東部地域に生息しており、山陰側では北部地域が生息域である。1990年の初頭までは県内に広く分布域があったが、2000年以降急速に分布域を狭め、現在は山陽側の保全地域と山陰側の保全地域にのみ、僅かに本種を見ることが出来る。この原因は、環境の変化による植生遷移と採集圧も大きく影響している。ここまで急激に減少した蝶類は少なく、絶滅危惧ⅠA類(CR)として選定した。山口県が日本の西限となり、分布上からも学術的研究価値は高い。



提供：後藤和夫 (2017.4.13 撮影)

## ■ クロヒカゲモドキ

絶滅危惧 I B 類 (EN) ↗ 絶滅危惧 I A 類 (CR)

本州の中部地方から中国山地、四国、九州の中央山地に局所的に分布する。県内では岩国市などの一部地域で発見されていたが、2000年代初頭から既産地の記録が途絶え始めた。2001年の報告を最後に度重なる調査でも確認できず、2016年と2017年は調査範囲を広げ念入りに探索した一種である。その結果、2017年の夏場以降周南市と岩国市から新たな産地の発見があった。ただ安定した産地かどうかは、今後に委ねられる。既存の産地は食草を含め生息環境が、植生遷移により喪失したことが衰退させた大きな要因となる。今回レッドリスト見直しもあり、絶滅危惧 I A 類 (CR) として選定した。



提供：五味 清（2017.7.20 撮影）

## 陸・淡水産貝類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ ミシマヒメベッコウ

殻高約 3.4mm、殻径約 4.3mm のやや高い円錐形をした微小巻き貝。萩市見島の固有種で、同島唯一自然林の残る日崎の山頂に限って生息するとされた。記載は 1956 年刊行の「山口県産貝類目録」（山口県立山口博物館）の中で、殻の特徴を「螺塔が高く強い光沢の暗角褐色」とし、殻全体のスケッチ図が示されたのみでなされた。現地調査の中で本種に酷似する個体が大関市豊北町、六連島など数カ所で見つかった。今回、タイプ産地と他地域の生体を剖検比較の結果両者は同一の特徴を有し、両者はいずれも基亜種ナミヒメベッコウのシノニムと判明した。普通種であり、カテゴリーに該当しないため削除とする。

絶滅危惧 I A 類 (CR) ↓ 削除



提供：増野和幸（2017.11.2 撮影）

### ■ サナギガイ

海岸の砂浜に生育するハマユウなどの海浜植物の根元などに生息する。全国での分布も局限されている。中国大陸から朝鮮半島の比較的寒冷な地域に分布の中心があり、日本での生息は寒冷時代の遺存種と考えられる。山口県内では、日本海側のごく限られた場所に生息しているが、近年、砂浜海岸の荒廃とともに海浜植物の枯死等生息環境は悪化している。生息範囲、個体数ともに減少している。カテゴリーのレベルアップに該当する。

絶滅危惧 I B 類 (EN) ↑ 絶滅危惧 I A 類 (CR)



提供：増野和幸（2018.1.24 撮影）

### ■ ハリマムシオイガイ

殻高約 2.5mm、殻径約 3.7mm、螺層 3・1/2 層の平巻状で、螺塔は低く扁平な巻き貝。殻口部の虫様管は大きく、殻口は二重縁となる。殻色は白～桃色で、表面には成長脈に添った縦肋が明瞭に現れ厚質堅固。角質の蓋をもつ。山口県内では 2 ヶ所から記録されているが、いずれも林内のやや乾燥気味な落葉の下で、極めて個体数が少ない。林床の破壊や乾燥等人為的攪乱に敏感である。高レベルの絶滅危惧種指定が妥当である。

新規 絶滅危惧 I A 類 (CR)



提供：増野和幸（2018.1.24 撮影）

## ■ オオタニシ

絶滅危惧 I A 類 (CR) ↓ 準絶滅危惧 (NT)

主として水田、池、沼、河川等に生息し、かつては各地で普通に見られたが、家庭排水や農薬などの影響による水質の悪化、また水田の圃場整備、土質改善等による生息適地の減少により見る機会が少なくなった。県内でも大堤やダム湖、河川の下流域など数カ所しか記録されていない。生息環境が水底ということもあり、水田用用水池が使用される機会が少なくなった現在、特に意識的な調査が実施されず、実態把握が困難状態である。傾向としては減少が進行しているが、十分な実態把握ができていない点から、カテゴリー上のレベルダウンが妥当である。



提供：増野和幸（2018.1.24 撮影）

## 植物（維管束植物）の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ モクゲンジ

準絶滅危惧 (NT) ↗ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

本州の海岸付近に生育するムクロジ科の落葉小高木。光市牛島は日本で初めて確認された自生地で、「牛島のモクゲンジ群生地」は山口県指定の天然記念物となっており、日本有数の群生地でもある。県内には光市牛島や周南市のほか瀬戸内海側の崖地に稀に見られる。現在、分布が局限されていることと、温暖化により各地の生育状況がかなり良くないことから、ランクの引き上げを行った。



提供：南 敦（2015.7.12 撮影）

### ■ ホソバノヤマハハコ

西日本の山地頂上付近の草地に生育するキク科の多年生草本。東日本～北日本の山地に分布する母種のヤマハハコに比べ、葉が細く、茎はそう生ずる。県内山地の山頂付近にも以前はよく見られたが、近年はほとんど見られなくなっている。生育地である山頂付近の草原の遷移進行や園芸採取などが個体数減少の原因と考えられる。そのため、今回新たに絶滅危惧ⅠA類(CR)に選定した。

新規 絶滅危惧ⅠA類 (CR)



提供：秋丸浩毅（2006.9.30 撮影）

## 植物（コケ植物）の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ■ オオミズゴケ

絶滅危惧 I 類 (CR+EN) → 絶滅危惧 I A 類 (CR)

本県のミズゴケ科は、オオミズゴケ、コバノホソベリミズゴケ、ヒメミズゴケ、ハリミズゴケの4種がこれまで確認されている。特にオオミズゴケは、杉や檜の林床の湿潤な環境で生育している。県内では群生地広さに差はあるが、すべての市町で確認できた。



▲ミズゴケの蒴 提供：林 正典 (2017.7.13 撮影)

しかし、園芸用の保水材料としての盗掘や、開発による乾燥化が進んでいることから前回の調査と比較すると著しく減少しているところが見られる。また、水田の周辺にかなりの量が生育しているが、今後高齢化が進むにつれ水田等が放置され、荒廃により高等植物の侵入や乾燥化が進み一層の減少が危惧される。

今回、県内で確認されているミズゴケ科（ハリミズゴケを除く）すべてを絶滅危惧 I A 類 (CR) にした理由は、盗掘による場合、種の判別が付きにくいいためミズゴケすべてを指定することとした。

### ■ キャラハゴケモドキ

変更なし 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

本種は樋口正信博士と出口博則博士により 1987 年に高知県高岡郡越知町の石灰岩転石上で採集された標本をタイプ標本として新属、新種として報告されたハイゴケ科に属する 1 属 1 種の蘚類である。これまで日本では岡山県、熊本県、大分県で確認されており、山口県では塩見隆行博士 (1975) により美祢市秋芳町の石灰岩転石で確認されている。



提供：林 正典 (2016.3.21 撮影)

前回の環境省絶滅危惧種調査では、絶滅したものだと思われていたが、2015 年萩市 (旧福栄村) の石灰岩転石数カ所で確認されており、その量は前回の調査で確認された美祢市秋芳町より多く、2016 年 3 月には、本種の胞子体も確認できている。

### ■ ウキゴケ

絶滅危惧 I 類 (CR+EN) → 情報不足 (DD)

本種は、水田や湿地の水中や地上に群生するウキゴケ科に属する。これまで県内で確認できたウキゴケ科は、絶滅危惧 I 類 (CR+EN) のウキゴケ、イチョウウキゴケを含む 7 種である。ウキゴケは、県内各地の湿地や水田で確認できるが、最近稲刈り後すぐに耕されているため減少傾向にある。



提供：林 正典

しかし、2014 年富永孝昭氏及び古木達郎博士が、日本産ウキゴケを再検討しミゾウキゴケ (*Riccia canalicullata* Hoffm.) とホソバウキゴケ (*Riccia stenophylla* Spruce) の 3 種に分けられることを発表したため、今後県内におけるウキゴケ属を再調査することが必要と考え、今回は情報不足 (DD) とした。

## ■ シャンハイハネゴケ

変更なし 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

本種は、中国東部の上海付近で初めて確認され、これまで中国、ヒマラヤ、日本に記録がある。国内では三重県、山口県に分布し、県内では宇部市楠町で、塩見隆行博士によって採集された。その標本を元に井上浩博士が日本新産種として 1982 年に発表された稀産種である。



提供：林 正典

前回の環境省絶滅危惧種調査では、手のひらサイズくらいの生育状況であった。周囲は放置された水田に杉、ヒノキが植林されている環境であるため絶滅する危険性もあったが、今回の調査では、生育状況が前回に比較して数倍の生育を確認することができたが、今後も継続的に生育状況を調査する必要があるため、前回同様、絶滅危惧 I 類 (CR+EN) とした。